



Title	＜書評＞Matan Oram, Modernity and crisis in the thought of Michel Foucault : the totality of reason
Author(s)	寺前, 建佑
Citation	共生学ジャーナル. 2019, 3, p. 187-194
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72890
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

Matan Oram

Modernity and crisis in the thought of Michel Foucault: the totality of reason
Routledge, 2017, 118 頁

寺前 建佑*

Kensuke TERAMAE

1. はじめに

本書は、合理性の視角からフーコーの思想を整理し、近代的合理性と彼の批判的思想の位相を検討する研究である。本書の著者は、イスラエルのテルアビブ大学にて、政治哲学を専攻する研究者である。著者はこれまでに、ハーバーマスにおけるコミュニケーションの合理性に関する研究、さらには、リベラル・デモクラシーの伝統を批判的に乗り越える研究を発表している。著者の研究関心は、西洋政治思想史における、合理主義や批判主義の潮流に向けられているようである。

評者が本書をとり上げる目的は、フーコー思想に内在しつつ、合理性と権力の関係をどのように抽出できるか、解明するための一視角を得ることである。著者は、合理主義と権力の関係を、フーコーがどのように記述したのかを検討しようとする。著者の議論を検討することで、評者は、今後の研究において、フーコー自身の知のネットワークに内在し、知と力の関係を明らかにするための準備作業としたい。

本書は、導入部、第1部（第1章～第3章。「合理主義と批判的思想」）、第2部（第4章～第10章。「ミシェル・フーコーと近代への批判的言説——規律的暴力の起源」）、そして結論部から成る。第1章および第2章では、デカルトやモンテーニュをはじめとした近代哲学の形成史を概観し、個人の概念が、ヒューマニズムの理念から、公共圏における主体へ変動したことを確認する。第3章は、カントにおける合理主義を、デカルトやモンテーニュのそれと比較し、カントの新しさを「自律的合理主義」の形成に見いだす。さらに第4章および第5章は、近代に関するフーコーの言説を手がかりに、知の合理的かつ科学的な概念の形成、あるいはまた、科学理論と権力の関係

*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程；u680042k@ecs.osaka-u.ac.jp

を整理していく。第6章および第7章では、『狂気の歴史』と『言葉と物』が参照され、人間科学に関するフーコーの歴史記述に、抑圧的な理性の起源を探ることを通じて、近代と危機の親和的關係を解釈しようとする。また第8章は、フーコーにおける啓蒙が、現在性を重視することを紹介し、彼をポスト・モダニズムの潮流に一括する図式を批判する。第9章から第10章にかけては、フッサールの現象学やハーバーマスの啓蒙概念と比較しながら、思想史上のフーコーの立ち位置が議論される。

以上の構成のうち、評者は、合理性や歴史記述の問題を扱う部分、すなわち第4章から第7章までを中心に整理したい。この部分に絞って整理することで、評者は、フーコーの言説にたいする著者の解釈を整理し、近代とフーコーの位相に関して、著者による位置づけを明らかにしたい。

2. 合理性と権力の関係

本書の著者は、「近代と危機」の文脈の中に、フーコーの思想を再定位し、彼の思考に内在的な意味と射程をとり出そうとする。その際、科学的な実証主義に関係して、「理性の全体性」という視点が導入され、フーコーの批判主義的な思想を整理する助けとされている。著者は、「理性の全体性」という言い回しを、社会にたいする科学的かつ総体的な合理化、この文脈において用いているようである。

もっとも、合理的なカテゴリーを通じた世界の認識は、近代社会に限られた事象ではない。近代以前にも、宗教的な権威に拠らずに、世界を認識するところみは見られた。しかし著者によれば、近代の特徴とは、社会の存立条件それ自体が、合理的な手続きを基礎として可能になるということである。社会の存立を可能にする制度や規範は、完全に客観的たり得るだろうか。著者は否という。社会制度の設計は、容易に特定の利益に影響されるからである。すなわち、

社会構造、道徳的規範、イデオロギー、学問分野、政治機関などは、科学に区分される場合であっても、操作された形で提示される恐れがある。したがって——よく知られているように——、こうした社会構造、道徳的規範、イデオロ

ギーといったものは、さまざまな排除と抑圧の力につながる些細な欺瞞——それが眼に見えるものであれ眼に見えないものであれ——を、潜在的に秘めていることになる。(Oram 2017:33)

著者は、社会の構造や規範が、特定の実践を排除する可能性を指摘している。つまりは、近代社会を支える合理性は、ある種の権力性を帯びてしまい、ひとつの支配の形態に利用され得るのである。加えて著者は、合理性に従う社会的手続きが、「パライダイム的な」支配の維持に貢献すると述べる。支配の成立が「パライダイム的」であるというのは、ある特定の人びとの利益に資する権力を維持する仕方、合理的とされる手続きが進行するからである。こうした権力に基づく支配は、力の維持に脅威となり得るような、外部のあらゆるカテゴリーを排除することで成り立つという。

排除の原理に支えられる近代社会には、危機を導く要素が埋めこまれている、と著者は指摘する。なぜならば、理性の普遍性に特権的地位を与え、これを定義する論理は、「非理性的な」存在や実践を定義し排除する場合があるからだ。著者は、「理性の全体性」という言葉を用いて、次の意味を指示しているのではないか。つまり、合理性の定義を社会の総体に適用する実践には、一方の社会的実践を分割することで禁止しつつ、他方における実践を誘導的に操作する危険が伴う。そしてこの危険は、フーコーが近代社会の存立の内に記述したものにほかならない、という意味である。

3. 歴史的ア・プリオリと経験的秩序

フーコーが合理性と権力の関係史を辿るとき、その意味での歴史とはどのようにして記述されるのか。ここで著者は、フーコーが『知の考古学』の中で提案した、「歴史的ア・プリオリ」の概念を参照する。著者の整理によれば、「歴史的ア・プリオリ」とは、ひとつの限定された期間における、観念の出現と科学的な実践を、明らかにするための方法である。

『狂気の歴史』をはじめとして、『臨床医学の誕生』や『言葉と物』の中で、フーコーが企図したのは、近代的な知の認識様式に関する発達史であった。こうしたフーコーの方法を、著者は、「知と理論の形成を可能にするイ

ンフラストラクチャー」(Oram 2017:34)を分析することと表現する。実際フーコーは、『言葉と物』序論において、「歴史的ア・プリオリ」に言及しており、「歴史的ア・プリオリ」を、経験的な「秩序の生のままの存在⁽¹⁾」を見えるようにするための概念であると定義している。フーコーにとっては、「秩序の生のままの存在」こそが、知の形成を支える要素であると考えられる。

さらに著者によれば、フーコーの記述方法は、秩序相互の関係の内にさらなる秩序を観察するものであるという。つまりフーコーは、「秩序化に貢献するコード」の使用と、「秩序」それ自体の概念への意識とのあいだに」(括弧内原著。Oram 2017:34)、一定の純粋な秩序を観察しようとするのである。そして秩序の中に秩序をみるフーコーの方法は、歴史を2つのレベルから記述していると著者はいう。少し長くなるが引用する。

結果的に、学問分野としての歴史は、19世紀以降、その機能区分に応じて、ある特定の目的を担うこととなる。つまりは、歴史は、「経験的なものが誕生する場所」を定義するのである。そしてこの場所から——既存の時系列がこしらえられる前に——、歴史それ自体の存在が現われるのだ。それゆえフーコーは、「歴史」とは、2つのレベルから観察されるべきものであるという。それはすなわち、出来事の「経験的な」次元であり、あるいはまた、出来事の目的を描写する叙述的な側面である。(Oram 2017:35)

ここでは、歴史観察のレベルとして、出来事それ自体の次元と、出来事を記述する次元を確認しておくにとどめる。『知の考古学』の中で、フーコーが、自身の記述方法について、「純粋に経験的な形象⁽²⁾」から出発して学問分野の形成と変換を分析するものである、と規定していたことを想起しよう。すなわち、フーコーは、出来事自体が出現するレベルと、出来事の出現を記述するレベルとを分割し、純粋に経験的なものを明るみに出そうとした。このように著者は解釈しているのだ。

著者によるこの解釈は、妥当であるように評者には思われる。ふたたび『言葉と物』序論に戻れば、フーコーが想定するのは、ひとつの文化を構成する経験と、学問的な理論や解釈のあいだに、一定の秩序が観察される、という前提であるといえるだろう。そしてこの作業仮説に基づいて、フーコー

は、経験科学の実践の下に、経験的な秩序それ自体を可能にするような、いわば二次的な秩序を記述したのではないだろうか。経験的秩序それ自体を可能にするものを指し示すために、フーコーは、秩序に秩序を見いだす二次的なレベルを導入し、これを「歴史的ア・プリオリ」として概念化したと考えられる。

4. 近代の危機と啓蒙の概念

本稿で評者は、フーコーの権力論や方法論を中心に、著者の解釈をみてきたけれども、ハーバーマス研究の蓄積を持つ著者は、フーコーの近代観を、どのように解釈するのだろうか。

周知の通りハーバーマスは、一元的な社会の合理化を批判し、近代知を自律的な主体を構成する要素として提示した。ハーバーマスによれば、経験科学の方法論は、科学テクノロジーに依拠している点で、合理性の外に向けられた関心を、価値自由の名の下に除外する危険がある。加えて、自律的な主体形成をめざすハーバーマスの理論は、「「知にたいする批判主義における危機」——そしてこれが彼にとっての近代を特徴づけるのだが——を前提としている」（括弧内原著。Oram 2017:99）。このように著者は解説する。

著者は、近代を「未完のプロジェクト」として掲げるハーバーマスには、近代知の危機の文脈を読みとっているようだ。そうであるならば、他方フーコーにたいしては、著者は、近代との関係をどのように読むのか。著者は、カントの啓蒙主義をめぐるフーコーの批判的言説に触れて、次のように述べる。

結果として、彼〔フーコー〕は、批判的思想を再構成した概念を提示することにより、これまで近代哲学がそこから自由にはなり得なかった問題群に取り組んだ。そうすることで、フーコーは、「近代」と啓蒙の相互関係に関する解釈上の弱点を明らかにし、同時に、「近代」と啓蒙の連関を危機の起源として暴き出すのである。（Oram 2017:29）

ここで著者は、「危機の起源」という表現を用いる。フーコーの言説は、

啓蒙の問題をカント以後も継続して扱う役割を担うもの、さらには近代の「危機の起源」を辿るものとして解釈されている。つまり著者は、フーコーの近代観に——ハーバーマスのそれと同様に——「知の批判主義における危機」を解釈しているといえるのではないか。この限りにおいて著者は、近代批判としてのフーコーを、ハーバーマスと近代の位相に引きつけた形で、提示しているように評者には思われる。

加えて著者は、本書の結論として、「フーコーが、近代をエートスとして照らしだす概念を認識していたこと」（イタリック体原著。Oram 2017:xiv）を確認し、フーコーの意図は近代への問いを促すことにあったとまとめている。すなわち著者は、フーコーが展開した概念群にある種の「エートスとしての近代」を解釈し、フーコーの近代観を啓蒙のプロジェクトの継続として、位置づけているといえるだろう。

著者による解釈と位置づけが、妥当であるか否か、いま評者に判断する権利はないが、フーコーが、近代知の危機を想定していたという見方には、検討の余地が残るのではないだろうか。近代の人間主義を批判するとき、フーコーの関心が向けられたのは、危機の起源を探究し危機を乗り越える方向にではなく、あくまで、近代的な主体形成についてその規則と機能の様式を検討する方向に、であったからである⁽³⁾。たしかにフーコーは、知の不安定性を記述し、近代の知は——近代以前の知がそうであったように——、新たな知に変更されることを付け加えた。しかしながら、ひとつの知が別様の知に変換されることを、フーコーは危機として理解していたのだろうか。この論点は今後の検討が必要だろう。

5. おわりに

みてきたように著者は、「近代と危機」および「理性の全体性」という視角、すなわちフーコーに外在的な参照軸を設定し、彼の批判主義を解明しようとした。結論部の冒頭にて著者は、上記2つの新たな視点を導入することにより、「現在の意味での「批判的哲学」を照射し」（括弧内原著。Oram 2017:106）ようとしたとまとめている。

本稿では評者は、フーコーが、合理性と権力の関係史をどのように記述し

たか整理し、著者が、フーコーの言説に危機の文脈を解釈していることを確認した。ただし、次の論点は検討の余地が残った。合理性と権力の機能的連関が知の不安定性を導出することは、フーコーにとって危機であるか否かについて。また仮に、近代の危機をフーコーが認識していたとするならば、フーコー自身はどの立ち位置から危機状況を批判したのか、これらについてである。

もちろん著者がこころみたように、フーコーに外在的な参照軸を導入し、彼の啓蒙観を危機の起源への批判として、理解することも可能だろう。とはいうものの、フーコー自身が記述した知そのものに内在して、近代知の不安定な形成をみていく視点こそ、重要であると評者には思われる。なぜならば、今後の研究における評者の作業仮説にすぎないけれども、フーコーの知が、すなわち認識の分割や変換を観察し人間科学の存立条件を明らかにする知が、一元的な啓蒙主義に還元され尽くされないような射程を秘めていた、と考えられるからである。そして彼の知の射程を検討する作業は、私たちが共生の方法を語るとき、ひとつの知的基盤となるのではないだろうか。

注

- (1) フーコー (1966=1974) 『言葉と物』 1041 頁。邦訳 19 頁。
- (2) 同 (1969=2012) 『知の考古学』 168 頁。邦訳 244 頁。
- (3) 同 (1969=1999) 「作者とは何か」 845 頁。邦訳 258 頁。

参考文献

- Foucault, Michel. 1966. *Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines*. Paris: Gallimard. (= 2015. *Œuvres*, tom. I, pp. 1033-1459. Paris: Gallimard.)
- . 1969. *L'archéologie du savoir*. Paris: Gallimard.
- . 1969. Qu'est ce qu'un auteur?, in *Dits et Écrits, 1954-1975*, éd. par D. Defert & F. Ewald, collab. J. Lagrange, Paris: Gallimard, 2001, éd. en 2 vol., coll. «Quarto», vol. I, pp. 817-849.
- Oram, Matan. 2017. *Modernity and Crisis in the Thought of Michel Foucault: The Totality of Reason*. Routledge.
- フーコー、ミシェル 1974 (=1966) 『言葉と物——人文科学の考古学』 渡辺一民・佐々木明訳、新潮社。

———2012 (=1969) 『知の考古学』 慎改康之訳、河出文庫。

———1999 (=1969) 「作者とは何か」 清水徹・根本美作子訳 『ミシェル・フーコー思考集成Ⅲ』 pp. 223-266、筑摩書房。